

京都大学	博士（文学）	氏名	郝 洪芳
論文題目	越境する親密性 —東アジアの紹介型国際結婚とグローバルな家族		
<p data-bbox="209 472 456 506">（論文内容の要旨）</p> <p data-bbox="193 526 1398 663">本研究は東アジア地域における国際結婚移住を対象として、その歴史的形成および実態の分析を通じて、東アジアの近代における国家、社会変動、親密性の相互作用を明らかにした。</p> <p data-bbox="193 685 1398 1249">1975年に日本における日本人男性と外国籍女性との結婚数が日本人女性と外国籍男性との結婚数をはじめて上回ったことが、東アジア社会間における結婚移住の始まりを示していたと言える。当初、日本人男性と結婚する女性は韓国籍が多かったが、やがて1980年代にフィリピン籍、1990年代後半から中国籍が最も多くなった。外国籍女性との結婚は日本だけにとどまらず、2000年頃には韓国や台湾地域においても急増した。さらに2009年あたりから、中国人男性もベトナム籍女性と結婚するようになってきた。東アジアの各国で増加してきた国際結婚は、仲介業者あるいは親戚、友人による紹介を通じて成婚することが多い。たいてい男性が1回、あるいは2回ほど女性の暮らす地域に行ってお見合いし、結婚式をあげる。そして、結婚届を持って女性の配偶者ビザを申請し、女性がビザを取得してから初めて男性の暮らす地域に移住する。紹介型国際結婚は東アジア地域における婚姻移住の特徴となっている。</p> <p data-bbox="193 1270 1398 1570">本研究はこのような紹介型国際結婚を、送り出し社会に根ざした視点から研究するものである。移住する女性たちは、従属する犠牲者なのか、それとも抵抗する主体なのか。結婚移住した女性たちは望んだ通りの結婚や夫婦関係が達成できたのか。本研究は国際結婚を選択して越境移住した女性たちの主観的な意味づけを明らかにすることを通じて、東アジアに特徴的な結婚移住がはらむ問題とその背景を解明することを目的とする。</p> <p data-bbox="193 1590 1398 2047">本論文は8章からなっている。まず第一章は理論枠組みと研究目的について述べた。国際移動に伴う結婚は、東アジアの「移動の女性化」や「親密性の労働の国際分業」を構成している。先行研究において、国家間の経済格差にもとづく「親密性の商品化」という構造的な背景のもとで、女性たちはより良い人生を求め、妻や母の役割を果たし、異国で奮闘する主体的な姿が描かれてきた。本研究はこれを踏まえて、結婚と国際移動をめぐる構造と主体のダイナミクスをトランスナショナルな空間において分析し、紹介型国際結婚をして越境移動する女性たちは、どのように親密性を構築し維持しているのかを、個人、夫婦、家族と、性、ジェンダー、国家との関係と、その相互作用を通じて考えていくことにした。</p>			

第二章では研究方法について説明を行った。マルチサイテッド・エスノグラフィー (multi-sited ethnography) という研究方法を採用し、日本、中国、台湾、ベトナムという複数の地域で多様な対象に対して実施した調査に基づくデータを用いた。この方法の重要な意義は、複数のフィールドのつながりや関連を記述によって再構成することで、グローバル化する世界を捉えることにあり、複数のフィールドを比較、確認することによって、より本質的な問題を発見できる点にある。また、インタビュー調査においても分析の過程においても中心部と周縁部の往還を意識しながら調査対象者と関係を構築し、再帰的なエスノグラフィーの生成を実践するように努めた。さらに、個別的なインタビューは基本的に半構造化深層面接の方法 (semi-structured in-depth interview) を用いた。特に重要だと思われる調査対象には、インターネットや電話などの通信手段も併せて活用し、何年間も連絡を保って、追跡調査および観察をしてきた。最初の時点で調査の主旨を了解してもらい、その後、長くつき合った一部の対象者とは友人のような関係が構築されてきた。

第三章においては、東アジアにおける国際移動に伴う結婚の歴史と現状について述べた。アメリカへ渡る写真花嫁、満洲へ渡る大陸花嫁、ブラジルへ渡る写真花嫁から、日本へ渡るアジア人花嫁という東アジア間の国際移動と結婚の歴史的な変遷を辿った。その上で日本、台湾、韓国、中国の統計から国際結婚の現状を概観した。その結果、東アジアにおいては結婚移住が連鎖的に起きていることが明らかになった。日本が送り出し側から受け入れ側になり、その後、韓国と台湾が送り出し側から受け入れ側になった。さらに、中国も送り出し側から受け入れ側になったという連鎖が起きている。このような連鎖を東アジア地域内の人の移動が一番盛んだった日本帝国時期の人の移動と比較すると、結婚移住者の動きは日本帝国期の逆方向の移動になっていることがわかった。

第四章では、日本帝国期の移動から、どのようにして今日の紹介型国際結婚の移動の流れが形成されたのかを、中国から日本、韓国、台湾への紹介型国際結婚移住者の流れの分析を通じて明らかにした。結婚移住の流れができたのは、越境する人間関係のネットワークが存在しているからである。このネットワークは血縁・族縁・地縁によって形成されてきた。こうした越境ネットワークを通じて、情報が伝達され、相互扶助が行われる。一方、国境を越えたネットワークの両端は、お互い境界を越えて国籍や戸籍上の他者となっているため、自由に移動や家族結合ができない。この親族の他者化が今日の紹介型国際結婚の形成を促した。

第五章では、国際結婚当事者（およびその家族）であると同時に仲介業者でもある調査対象者の語りを通じて、紹介型国際結婚の全体像を提示した。紹介型国際結婚による移住の流れが一旦形成されると、国際結婚した夫婦がさらに親族や友人に国際結婚の紹介をして仲介業者になり、場合によっては家族、留学生、研修生、恋愛結婚夫

婦、旅行会社なども取り込まれていくことで、紹介型国際結婚が「産業」として発展した。しかし、国際結婚当事者でありながら仲介業者でもある対象者たちの語りから、紹介型国際結婚は男女間の不平等の上に成り立っていることが示された。男性側と仲介業者が主導権をとり、情報が不十分な中、女性側は自ら選択する権利を持たずに、男性との歳の差を受入れ、大金の紹介費用を支払う側になっている。

第六章では、仲介業者のトランスナショナルネットワークによる紹介型国際結婚の発展、グローバルな家族の形成を取り上げ、国際結婚の越境連鎖を解明した。国際結婚移住は、女性の送り出し地域の男性の結婚難をもたらしている一方、女性は移動することで経済的な安定を得ることができ、仕送りを通じて自分の兄弟に婚資などのより結婚しやすい条件をもたらしている。結婚をめぐる国際移動の持続と連鎖は、仲介業者のトランスナショナルなネットワークの形成を基盤とし、もはや二国間に限定されるのではなく、多国間に広がっている。そうすると、一つの家族の中において、娘たちが日本と韓国に国際結婚移住して、息子がベトナム人女性と結婚するというようなグローバルな家族が形成されるようになった。

第七章では、紹介型国際結婚のお見合いの場面に焦点をあて、成婚プロセスにおける結婚当事者及び仲介業者らの間の相互行為を分析した。日本人男性と中国人女性、中国人男性とベトナム人女性とのそれぞれのお見合い現場の参与観察とインタビューから、お見合い現場における男性、女性、仲介業者たちの行動を分析することによって、当事者らの結婚動機を論じた。表舞台では、男女それぞれの出身国の間のヒエラルキーが再生産されている。舞台装置、お見合いの流れ、男女の態度は全部男性がより優位に、女性が劣位にパフォーマンスされる。一方、仲介業者を中心とするチームで形成される舞台裏では、仲介業者はそれぞれのチーム内で、同類、腹心、訓練スペシャリストの役割をしている。同類と腹心の役割で信頼関係を形成し、成婚に導くようにお見合いのための訓練も行う。役割は表舞台の権力関係に対応している。表舞台では男性の方が優位で、女性の方は劣位にあるため、舞台裏における男性側のチームは男性側の優位な立場と権力の確認や強化に努める一方で、舞台裏における女性側のチームは、男性側を揶揄したり、抵抗の戦略を考えたりすることになる。さらに、個人としての舞台裏においては、お見合い参加者個人が仲介業者に対する疑問や、紹介型国際結婚の問題点や世間の偏見を認識しながらも、それを選択しようとするという、対他的社会的アイデンティティと自我アイデンティティとの間の矛盾が見られる。国際結婚はそれぞれの社会でスティグマを持つ男性と女性が、「常人」に越境しようとするときの戦略であることがわかった。

第八章では、それぞれ日本、台湾、中国に結婚移住した3人の妻の結婚と再婚の過程を比較しながら、結婚後の夫婦関係について分析を行った。その結果、紹介型国際結婚においては、一般の結婚と同様、女性側の夫婦関係満足度は夫婦間の親密な関係

によって大きく規定される、ということが明らかになった。紹介型国際結婚をした彼女らが追求しているのは、夫との親密性からメンタルサポートをもらい、幸福を感じることであり、こうした「親密性」を形成し継続していくことこそが、紹介型国際結婚の持続要因である。しかし、こうした婚姻関係を達成するのは簡単ではないことが明確になった。なぜなら、紹介型国際結婚の場合、結婚を契機として初めて国際移動が生じるため、出身地で評価されていた本人の資質や、本人が有していた権利が受け入れ国では「無化」されてしまい、夫婦間の権利の不均衡が増幅されてしまうからである。加えて、たとえ受け入れ国の男性と結婚し、その家族の成員になったとしても、政治的・経済的な諸権利が認められていなければ、社会とのつながりを構築することがきわめて困難になる。また、言語が通じて、あるいは、たとえ永住権を取得することや帰化により、制度的に社会参加の権利を有するようになって、受け入れ社会との間に「社会の壁」がまだ存在するかもしれない。さらに、結婚移住者がもっぱら嫁ぎ先の家族に経済的に依存していると、嫁ぎ先の家族に問題（死別、失業等）が生じれば婚姻関係は不安定にならざるをえない。そのため、結婚して国際移住した後、理想的な夫婦関係を構築・維持するためには、国際移動した女性が受け入れ先の社会で政治・文化・経済の各側面から多層的に「包摂」され、社会統合されることが必要であることを明らかになった。

最後に、結論と今後の展望について述べた。本研究は東アジアを中心に、第2次大戦後に国境線が引き直され、冷戦を経て、各国や地域がふたたび交流し始めた時に生じた紹介型国際結婚という現象の形成や実態を検討した。これらの検討を通じて、近代、国家、社会変動と親密性との関係が浮かびあがってきた。東アジアの場合、国家が近代化するなかで、外への移民を生み出し、また国境線の変更により親族の分離や他者化などがおこり、親密圏に影響を与えた。一方、人々はこの越境するネットワークを利用して、親密関係を求めて家族を形成し、また家族を越境移動させ、ビジネスを起こし、アイデンティティの再構成を試みてきた。

これらの分析から本研究が見出したのは、越境する親密性で、つまり平等ではない関係における親密性のことである。本研究が取り上げた紹介型国際結婚に示されているように、親密性は成婚プロセスにおいても結婚後の生活においても重要な要素となっている。しかし、越境する親密性は国家間の格差、制度、社会に強く影響され、状況に応じて変化している。現在、日本や韓国、台湾では紹介型国際結婚の成婚数が激減してきており、東アジアの戦後とも言える一つの時代が終焉しつつあると感じられる。それは、各国が女性の結婚移住の流れを制限するようになった上、近年の東アジア内の観光や労働移動の規制緩和などによる越境移動ルートの多様化、各国間の経済格差の縮小などの要因が影響しているだろう。国境を挟んでも、観光などの直接接合できるルートが増えれば、紹介は不要である。今後は恋愛結婚が主流になるだろう。

(論文審査の結果の要旨)

1990年代から2000年代にかけて、国際結婚は東アジア地域における国際移動を特徴づける現象となった。国際結婚の増加は世界的な現象であるが、東アジアの国際結婚は2つの理由で特に注目されてきた。まず東アジア諸国は労働移動に厳しい制約を設けているため、国際移動全体に占める婚姻移動の重要性が高いということである。また、東アジアの国際結婚は仲介業者などによる紹介型国際結婚が多いため、これを「親密性の商品化」と捉え、国際結婚する女性たちを犠牲者として見る、あるいは経済目的の移住のために夫を利用する危険な存在として描く、両極端の立場からの研究がなされてきた。

これらの既存研究のほとんどが受け入れ側の視点に立つものであったのに対し、本研究は移住する側の視点から出発する。1990年代半ば以降の東アジアの国際結婚市場において、移動する女性のマジョリティになったのは中国大陸出身者であった。著者は、主要な調査対象と同じ国の同じ階層出身者として、しかし同時に受け入れ側社会での研究蓄積を学んだ大学院生として、非対称な関係を自らの内に抱えた複雑な立場を反省的に自覚しながら、強みとして活かすことをめざした。

主要な調査方法として半構造化深層面接法を採用し、まず中国から日本への国際結婚に関して、中国人妻23名、日本人夫14名、仲介業者11名に対してインタビュー調査を行った。さらに中国大陸から台湾への移住に関して、中国大陸人妻12名、台湾人夫2名のインタビューを行った。また中国東北部での調査中にベトナムから中国への国際結婚が始まったことにいち早く注目し、国際婚姻移動のチェーンマイグレーションの実態を解明するため、ベトナム人妻12名、中国人夫9名、仲介業者5名のインタビューを実施した。トランスナショナルな現象である国際結婚を調査するため、日本、中国、ベトナム、台湾で調査を実施して、二国間に留まらない複雑な国際婚姻移動のネットワークを面として捉えるマルチサイトッド・エスノグラフィーを実践したことは高く評価できる。

東アジアの国際結婚研究において、本論文は3つの貢献をなしたと言えよう。

第一に、紹介型国際結婚をする女性という当事者の主体に徹底的に寄り添い、彼女たち自身による主観的な意味づけ、およびトランスナショナルな構造的条件のもとでの主体形成をめぐる交渉を丹念に描き出したことである。紹介型国際結婚のお見合いに立ち会って参与観察を行い、その後はインターネットや電話などの通信手段も活用して何年間も連絡を保ち、追跡調査および観察を続けてきた。調査の趣旨は最初の時点で説明し了解してもらっている。長くつき合った一部の対象者とは友人のような関係が構築され、夫とのコミュニケーションを手助けする通訳の役割を果たしたケースもある。従来のエスノグラフィーにおける調査者と非調査者の間の非対称的な関係を超越しようとした実践と言えよう。お見合いの場面を扱った第7章では、アーヴィング・ゴフマンのドラマトゥルギーの枠組みを用い、女性側と男性側の表舞台と舞台裏のそれぞれについて、抵抗の戦略やアイデンティティの矛盾などを重層的に分析し、国際

結婚はそれぞれの社会でスティグマを持つ男性と女性が「常人」に越境しようとする戦略であるという結論を得た。女性側は親密関係の挫折や離婚など、男性側は外見や経済力などの面でスティグマをもちながら、普通に親密性を経験して幸せな家庭生活を営みたいという願望からの選択だという。従来の研究では特殊性が強調されてきた紹介型国際結婚が一般の結婚と地続きであることを示した基本認識の転換である。

では国際結婚が良好な関係で長期間継続する条件は何かを問い、親密性と社会統合という答えを出したのが、本論文の第二の貢献である。第8章ではそれぞれ日本、台湾、中国に結婚移住した3人の妻の夫婦関係と主観的意味付けの変化を、長期的かつ反復的なインタビュー調査により分析した。妻の夫婦関係満足度は夫婦間の親密性から得られる幸福に強く規定されるという知見は、一般の結婚との共通性をふたたび示す。しかしその達成の妨げになるのが、移動した女性の受入れ先社会での活動を阻む制度的・社会的・経済的な「壁」である。外国人配偶者の権利が制限され、出身地で評価されていた本人の資質（学歴等）や権利は無化され、「夫婦間の不平等」が増幅されてしまう。夫婦関係を歪めないためには国際結婚移住者の社会統合が必要という本章の結論は、親密圏の質は公共圏にも依存するという事実の指摘であり、一般の結婚についても示唆を与える広がりをもつ。

本論文の第三の貢献は、東アジアの国際結婚を日本帝国時代まで遡る歴史的視野のもとに位置づけなおしたことである。人口移動が盛んだった日本帝国の縮小と東西対立の影響で国境線が引き直され、国境により隔てられた親族が戸籍と国籍上の他者となる「親族の他者化」が起きた。冷戦終結後、中国残留孤児・婦人の日本帰国、中国朝鮮族と韓国との間の離散家族の連絡復活、中国大陸と台湾の間の元軍人とその親族の交流再開などが起きて、越境家族／民族圏が形成された。この家族ネットワークを通じたお見合いにより通婚圏が広がり、まだ大きかった経済格差を背景に、20世紀末の国際結婚の増加をもたらした。婚姻を媒介とした国際移住は、東アジアの特定の歴史的文脈と政治経済状況を前提に発達した国際移動の形態であった。

最後の「親族の他者化」については、戸籍制度、国籍制度のより厳密な検討を行い、概念を彫琢する余地があろう。しかしこれは新たな研究課題として取り組むべきものであって、本論文の価値を損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2020年12月15日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。